

# ヒトラーの真の敵

——芸術の政治化のために——

田 野 大 輔

## 1 はじめに

「複製技術の時代における芸術作品」のエピローグで、ヴァルター・ベンヤミンはファシズムによる「政治の美学化 Ästhetisierung der Politik」を批判し、「共産主義はこれにたいして芸術の政治化 Politisierung der Kunst をもって応えるであろう」[ベンヤミン 1970: 46-7] と結んでいる<sup>1)</sup>。ベンヤミンは「芸術の政治化」についてこれ以上論じてはおらず、それが反ファシズム闘争の戦術としてどの程度の現実性をもっていたかは不明である。「芸術の政治化」という標語は、「政治の美学化」を転倒させただけのようにも思えるし、そうした言葉遊びでファシズムに対抗できるとは、どうてい考えられない。だがそれにもかかわらず、この転倒には反ファシズム闘争の成否の鍵が秘められていると考えられる。それは敵に真っ向から対抗するのではなく、敵の武器を逆用して反撃するという戦術である。ベンヤミンが一貫してこうした戦術を追求していたことは、「歴史哲学テーゼ」のなかの次の主張からも読み取れる。

「被抑圧者の伝統は、われわれがそのなかに生きている『非常事態』が非常ならぬ通常の状態であることを教えている。われわれはこれに応じた歴史概念を形成しなければならない。この場合、真の非常事態を招きよせることがわれわれの目前の課題となる。それができれば、われわれの反ファシズム闘争の陣地は強化されるだろう。ファシズムに少なからぬチャンスを与えているのは、ファシズムの対抗者たちが歴史の規則としての進歩の名においてファシズムに対抗していることなのだ」[ベンヤミン 1969a: 118]。

ファシズムの支配という「非常事態」を断ち切るためには、「真の非常事態」を招きよせなければならないというのであるが、そこにはファシズムのもたらした「非常

---

1) ナチズムにおける「政治の美学化」の問題については、拙稿 [田野 1998] を参照。

事態」を逆手にとって抵抗するという基本的な狙いを認めることができよう。本稿の課題は、ベンヤミンによって抽象的に提起されたこの戦術をナチ体制下の現実にそくして具体化し、抵抗の新たな可能性を示すことである。

もっとも、反ファシズム闘争がみずからの手でファシズムからの解放をなしとげられなかったことは、歴史的な事実である。組織的な抵抗運動に加わった者はごく少数でしかなく、左翼の活動家であれ、軍部の反対派であれ、抵抗者たちは社会的に孤立していた。絶望的な状況のなかで命を賭して闘った彼らの行動は、倫理的には賞賛されてしかるべきであるが、政治的には敗北を運命づけられていた。こうした現実を考えれば、われわれの課題は抵抗の潜在的な可能性を探ることではなければならない。それはベンヤミンの歴史哲学を実践すること、つまり歴史の連続性を破壊して、そこに救済の契機を見いだすことでもある。抵抗者たちの勇気と犠牲的精神にいかん感銘を受けようとも、その名を殉教者の列伝に加えるだけで満足するなら、彼らを歴史から救いだすことはできない。

従来の抵抗研究は、特定の抵抗グループを対象にしたものが多く、主としてイデオロギーや組織を背景にした狭義の抵抗を扱ってきた。だが抵抗には無数の段階があり、抵抗運動に身を投じることにはじまって、労働忌避やサボタージュにいたるまで、様々な行動形態が含まれる。近年の研究は、より静かな非同調行動をも視野に入れることで、抵抗の幅広いスペクトルを明らかにしている。しかしながら、そこでも抵抗の可能性が十分に示されたとはいいがたい。多くの研究者は、これらの非同調行動をもつばら政治性や組織性の欠如をもって狭義の抵抗から区別しているが、そうした区別ではどんな用語を使っても残余概念にしかならないだろう<sup>2)</sup>。またデートレフ・ポイカートのように、順応と抵抗の間に諸段階を設定するにしても、それぞれを区別する明確な基準を示さなければ無意味である<sup>3)</sup>。従来の研究はほとんど例外なく、そうした基準を抵抗の政治的動機やイデオロギー的前提にもとめたため、研究者の価値判断に

2) たとえば、ティモシー・メイスンは「政治的抵抗 (politischer Widerstand)」と「反抗 (Opposition)」という概念を区別し、前者をナチに弾圧された組織の支持者による政治的に意識した行動とする一方、後者を無意識的で自然発生的な、主として物質的な利害にもとづく行動 (労働拒否や仮病欠勤、サボタージュなど) としている [Mason 1981 : 293]。同様に、ブロシャートも「抵抗 (Widerstand)」を政治的な抵抗運動をさす概念としてもちいる一方、「抵抗力 (Resistenz)」概念を本人のイデオロギーや動機、勢力党派に関わりのないものともちいている [Broszat 1981 : 697-9]。

3) ポイカートは、ナチ体制下の非同調行動の諸形態を体制批判の範囲 (部分的/全体的) と行動の影響範囲 (私的/国家次元) という2つの尺度によって分類し、「非同調 (Nonkonformität)」——「拒否 (Verweigerung)」——「抗議 (Protest)」——「抵抗 (Widerstand)」という図式を提示している [ポイカート 1991 : 116-7]。

もとづいた恣意的な分析が行われがちであった。

こうした状況に鑑みると、抵抗の戦術に焦点を絞った分析が有効ではないかと考えられる。何のために抵抗したかではなく、いかに抵抗したかに着目することで、順応と抵抗の間の多様な行動形態をもう少し明確に区別することができよう。ベンヤミンの戦術はいうに及ばず、そもそも戦術によって抵抗を分析するという試みじたいがほとんど行われてこなかったから、これによって新たな知見が得られる可能性は十分にある。もちろん、ナチ体制下には多様な戦術にもとづく多様な抵抗が存在し、それぞれに関する個別研究も膨大な数に達するので、あらゆる抵抗の戦術を等しく秤量するわけにはいかない。ここでは特定の戦術に焦点をあてることにならざるをえないが、ベンヤミンのいうようにファシズムの本質が「政治の美学化」にあったとすれば、その攻略に狙いを定めた戦術の分析がまず行われてしかるべきだろう。こうした分析によって「ヒトラーの真の敵」の所在が明らかにされ、ナチズムの支配を攻略するための突破口が切りひらかれるはずである。

## 2 無名の男

「ヒトラーの真の敵」について、ジョゼフ・P・スターンは次のような興味深い指摘を行っている。

「ヒトラーの真の敵——道徳的次元で彼の反対側に立つもの——は、軍の指導者やユンカーの間には見いだされない。彼らは全員、政治的目的や愛国的な関心事では、ヒトラーと異なるところはなかった。また、新旧両教会の聖職者たちも、ヒトラーの真の敵ではなかった。殉教者は、抵抗というよりも、教会の伝統にしたがって自己犠牲を選んだからである……ヒトラーの真の敵といえるのは、ヒトラーと同じ社会的状況から出てきた、宗教的ないし思想的背景をもたずに、ヒトラーとはまったく違った別の道徳的世界に生き、死んでいった一人の『無名の』男である。彼の名前はヨハン・ゲオルク・エルザーという」[スターン 1983：196]。

この男はシュヴァーベン出身の指物職人で、1939年11月8日にヒトラー爆殺を企てた人物である。彼がヒトラーの演説にあわせてミュンヘンのビアホール「ビュルガーブロイケラー」に仕掛けた爆弾は、定刻どおりに爆発して多数の死傷者をだしたものの、ヒトラーが予定よりはやく退席していたため、暗殺は未遂に終わった。彼はその晩にスイス国境で逮捕され、ゲシュタポによる訊問・拘禁をへて、終戦直前の1945年4月に処刑された<sup>4)</sup>。これだけを聞けば、エルザーも他の抵抗者たちとかわるところが

ないように思われる。暗殺に失敗したこの男が「ヒトラーの真の敵」とされる所以は何なのか。

スターンが強調しているのは、エルザーが「宗教的ないし思想的背景」をもたない「無名の」男だったことである。左翼の活動家がイデオロギーに忠誠を誓い、組織的な活動にもかかわらずほとんど成果をあげることができなかったのにたいし、この暗殺者は何ものにも与さず、たった一人で黙々と計画を準備した。暗殺の失敗は偶然によるものであり、これほど標的に肉薄した企てとしては、軍部反対派によるヒトラー爆殺計画があげられるのみであろう。1944年7月20日のクーデタ未遂事件は、ドイツの抵抗運動のなかでも比類のないもので、その重要性は失敗によって損なわれることはない。だが事件の首謀者たちが軍の要職にあったことは、計画の組織的遂行を可能にした反面、大きな足枷にもなっていた。軍部の目的と利害がナチ指導部のそれとあまりにも一致しすぎていたため、彼らは戦況が有利なうちは行動に踏み切ることができず、敗色が濃厚になるのを待たねばならなかったのである。一匹狼だったエルザーには、そうした足枷はなかった。彼は個人的な信念からヒトラー暗殺を決意し、躊躇なく実行したのであって、スターンがいうように、「彼の下した決定——イデオロギーに抗し、品位と正義に与する決定——は、自由人の選択であった」[スターン 1983：217]。

それではなぜエルザーは暗殺を決意したのか。供述によれば、彼は労働者を抑圧し、戦争につき進むドイツの状況に不満を抱いていた。そして、「ドイツの状況は現在の指導者を排除することによってのみ変えることができる」[Ortner 1993：139] という信念から、自分の手で行動をおこしたのだという。きわめて単純な動機であるが、それだけに直截で、素朴な正義感に裏打ちされた強さがある。エルザーをつき動かしたのは、そうした民衆のモラルというべきもので、おそらくは何百万ものドイツ人が胸のうちに秘めていた思いだった。社会的境遇においても、彼は民衆に属していた。この男は一介の職人で、もの静かで控えめな性格であり、ナチ党機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』によれば、「この男はとくに目立つ犯罪者の人相をしておらず……、彼をそばで観察していると、目の前にいるのが極悪の怪物だということを一瞬忘れてしまう」[Gruchmann 1970：22] ような人物だったという。ごく平凡なありきたりの人間という意味で、エルザーはまさに「無名の」男、大衆社会的状況が生みだした「孤独な群衆」の一員にほかならなかった。こうしたことは、エルザーの大き

---

4) エルザーについては、スターン [1983] の考察のほか、ロター・グルフマン [Gruchmann 1970] やヘルムート・オルトナー [Ortner 1993] による伝記を参照。

な強みだった。彼はその匿名性によって、ゲシュタポの監視網をすり抜けることができたからである。だがそれ以上に重要なのは、この男の出自がスターンのいう「ヒトラーと同じ社会的状況」にあった点である。エルザーとヒトラーは同時代人であり、この暗殺者を育んだ社会はナチズムの産みの親でもあった。それはとりもなおさず、ヒトラーの権力基盤そのものに、これを瓦解させる契機が潜んでいたということを意味している。エルザーの思考は時代精神に規定されており、それどころかナチのイデオロギーを部分的に受け入れてさえいた。彼はゲシュタポの訊問にたいして、「当時わたしはナチズムを倒そうとは考えていなかった」[Ortner 1993: 140]と供述しているし、釈放されたらどうするかと聞かれて、「民族共同体に順応し、貢献するよう努めたい」[Ortner 1993: 204]と答えている。これは多分に罪のがれの方便だと思われるが、抵抗の闘士ならけっして口にしない言葉であろう。彼はただヒトラーの「政治的目標設定を抑制すること」[Ortner 1993: 139]が必要だと感じていたのだった。

このような人物がヒトラー暗殺を企て、成功の一步手前にまで達したことは、ナチ当局に大きな脅威を与えたに違いない。この男はゲシュタポもノーマークだったし、国境の検問に偶然ひっかかりさえしなければ、事件の真相は闇のなかだったであろう。逮捕後の訊問でも、彼は単独で犯行に及んだことを自供しただけで、犯行の背後関係は明らかにならなかった。だが当局としては、この自供を信じるわけにはいかなかった。エルザー単独の犯行だとしたら、彼のようなどこにでもいる男によって、いつまた同じような事件がひきおこされてもおかしくないことになるからである。したがって、この得体の知れない人物にたいしては、都合のよい図式をあてはめて背後関係を捏造するしかなかった。この無名の暗殺者はヒトラーの理解を超えた存在であって、そうした人物こそが独裁者を震撼させえたのである。事実、ヒトラーは暗殺事件が単独犯によるものだということを信じようとせず、エルザーをイギリス政府に雇われたスパイに仕立てあげようと躍起になっていた。この暗殺者が「ヒトラーの特別の囚人」として終戦の1ヶ月前まで強制収容所で生かされていたのも、戦後に裁判を開いて出廷させ、黒幕のイギリス政府を弾劾するためだった[スターン 1983: 213]。ヒトラーは無名の男に命を狙われたことを認めるわけにはいかなかったのである。エルザーは無名の男として「民族共同体」に潜伏し、意表をついた一撃でこれを内部から解体する可能性を示したのであり、そこにこの男の「ヒトラーの真の敵」たる所以があったといえよう。

もっとも、エルザーの行動に致命的な問題があったことも強調しておかねばならない。それは国民の大部分がヒトラーを支持していた状況にあつては、暗殺という行動

が圧倒的な拒否反応に直面せざるをえなかったことである。その点では、軍部反対派も同じ問題を抱えていた。暗殺が未遂に終わった後、国民の多くは彼らに憤激をあらわにし、総統が間一髪で殺害をまぬがれたことを神の摂理と讃えたのである。暗殺事件は逆に国民を結束させる結果に終わったともいえよう<sup>5)</sup>。もし仮に暗殺が成功していたとしても、新たな「七首伝説」が生まれた可能性もある。エルザーにせよ、軍部反対派にせよ、暗殺を計画するようになったのは、彼らが国民大多数から孤立していたからにほかならない。暗殺者たちは幅広い支持を得られなかったし、支持を期待してもいかなかった。広範な国民の支持にささえられた体制への抵抗としては、彼らの行動に限界があったことは明らかである。

それではどんな行動が必要だったのだろうか。さしあたって考えられるのは、エルザーの行動が体制の基盤に転倒の契機が潜んでいることを露呈させたとすれば、暗殺以外の方法でこれを利用することもできたのではないかということである。この暗殺者の最大の誤ちは、攻撃の対象を取り違えていたことにある。爆弾で独裁者の物理的身体に危害を加えるよりも、言説でその象徴的身体を攻撃すべきだったのではないだろうか。真の敵はヒトラー個人ではなく、彼の支配の本質をなす「政治の美学化」だったはずである。これを攻略するためにベンヤミンが提起した戦術が「芸術の政治化」であるが、それはファシズムによる「政治の美学化」を転倒させ、これを反ファシズム闘争の武器として逆用しようとするものだった。そこで次に、ふたたびベンヤミンにたち帰って、こうした戦術の可能性を考えてみたい。

### 3 引用の技法

ベンヤミンの考えでは、「芸術の政治化」の成否はいかに敵の言説を引用するかにかかっていた。そうした引用の技法について、彼は次のように説明している。

「引用文は語を名によって呼びあげ、この語をその関連からひき離し破壊する。しかし、まさにこのことによって、引用文はその破壊した語をその根源へと呼び帰してもいるのだ。語は、新しいテキストのなかに、韻を保ち、響きわたり、和

---

5) エルザーの事件の後、親衛隊保安部は次のように報告している。「ミュンヘンの暗殺事件は、ドイツ国民の一体感を著しく強化した」[Boberach 1984 : 449]。亡命社会民主党の通信も、「一般的に見て、爆弾事件の政治的帰結は決意の強化だった」[Behnken 1980 Bd. 6 : 1024-5]と指摘している。7月20日事件の後にも、親衛隊保安部は次のように結論づけている。「総統が暗殺の犠牲にならなかったことで、人々は安堵している。ほぼ例外なく、総統との結びつきが深まり、指導部への信頼が強まった」[Boberach 1984 : 6684]。

音を奏でながらその姿をあらわす……そこに映しだされるのは天使の言葉だ」  
[ベンヤミン 1969b : 79]。

歴史を野蛮の連続と見ていたベンヤミンにとって、引用による破壊と救済のみが唯一の希望だった。引用することは、言説をその元来のコンテキストから切り離し、新たなコンテキストのなかに位置づけて、革命的な力を発揮させることである。それは、見慣れたものをその関連からずらして新奇なものにするという意味では、ベルトルト・ブレヒトのいう「異化効果」と同じことをさしている。ベンヤミンはこれを「モンタージュ」として理解し、断片の組み合わせが切りひらく新たな可能性に目を向ける<sup>6)</sup>。彼がとくに注目するのは、フォトモンタージュである。

「ダダイズムの革命的な力の基礎は、芸術をその根元的な確かさにおいて試すことにあった。絵画の要素と結びついた切符とか糸巻きとか煙草の吸いさしから、静物画が作りだされた……これらの革命的諸成分から多くのものが、フォトモンタージュのなかに救出された。ジョン・ハートフィールドの仕事について考えてくれさえすればいい」[ベンヤミン 1971 : 177]。

ジョン・ハートフィールドは、ベルリン・ダダの中心人物の一人で、フォトモンタージュの技法を駆使して、ナチズムを痛烈に風刺した写真家である<sup>7)</sup>。彼のほとんどの作品は『労働者絵入り新聞』(1936年に『国民絵入り新聞』と改称)に掲載され、共産党の政治宣伝を担ったが、ローラント・メルツが指摘するように、それらは「ヴァイマル共和国とヒトラー・ドイツの支配者のイデオロギーや政策を異化する表現」であり、「敵の議論をその宣伝的なコンテキストから切り離し、異質な議論の意味変化や機能転換によって自分の攻撃を行うもの」[März 1971 : 119] だった。

たとえば、代表的な作品の一つである『ヒトラー式敬礼の意味』を見てみよう(図版1)。そこでは右手をあげて敬礼しつつ、背後の資本家から金を受け取るヒトラーの姿が提示され、「ドイツ式敬礼」に新たな意味が付与されている。すなわち、「小さな男が大きな献金を請うている」というのである。この作品にもちいられている写真

6) ベンヤミンは、みずからの『パサージュ論』について、次のように述べている。「この仕事は、引用符なしで引用する術を最高度に発展させねばならない。その理論は、モンタージュの理論ともっとも密接に関係している」[ベンヤミン 1993 : 8]。

7) ハートフィールドについては、作品集 [Hertfield 1982] のほか、ミヒャエル・テーテベルク [Töteberg 1978] とローラント・メルツ [März 1971] の研究を参照。



図版1 『ヒトラー式敬礼の意味』  
(J・ハートフィールド)

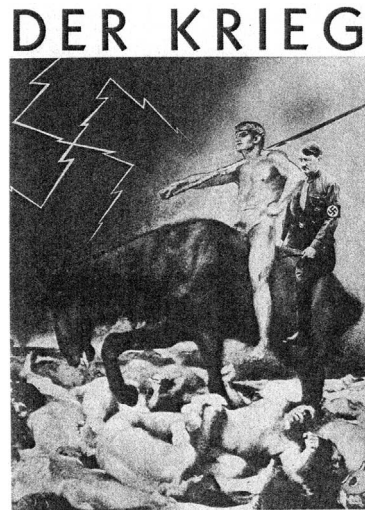
は新聞や雑誌から切り抜いてきたもので、誰もがよく知っている見慣れたイメージである。ハートフィールドはそうした既製の写真——ナチ政権成立後はゲッベルスの宣伝省に検閲された写真——を素材としながら、これらをいくつか合成することで、元来とはまったく異質の風刺的なメッセージを表現している。それは写真によるパロディというべきもので、写真じたいのもつ訴求力を逆用した痛快な風刺となっている。独裁者は権威をはぎ取られ、その姿が本来伝えるべきものとは逆のメッセージを、すなわち大資本との癒着を表現するのである。

こうした意味の転倒を方向づけているのが、写真につけられた説明文である。ベンヤミンがいうように、「われわれが写真家に要求すべきことは、写真を当世風の変質からひきはがし、写真に革命的な使用価値を与える画像の説明を付与する能力である」[ベンヤミン 1971: 178]。説明文によって写真は革命的手段になる。それは模写ではなく創造する写真、現実の断片を利用しつつ、現実についての新たな認識をもたらす写真である。「彼の技術は、ブック・カバーを政治の道具に変えたのである」[ベンヤミン 1971: 177]。こうした意味で、ハートフィールドの仕事はまさに「芸術の政治化」の実践と見なすことができよう。この写真家の政治的重要性は、ナチ当局も認めるところであった。エルヴィン・ショッケルは、『政治的プラカート』という著作のなかで、ハートフィールドのフォトモンタージュを「巧みなプラカート」の一つに数えている。「ドイツ共産党にとって、ヘルツフェルト＝ハートフィールドは最高の芸





図版2 『擬態』  
(J・ハートフィールド)



Ein Gemälde von Franz v. Stuck. Zeitgemäß montiert von John Heartfield

図版3 『戦争』  
(J・ハートフィールド)

術家の一人である」[Schockel 1939 : 188-9]。

「平和の兵士」[Heartfield 1981 : 11] をもって自任したハートフィールドは、ナチ政権成立直後の1933年に国外追放となったものの、1938年にイギリスに亡命するまでプラハで活動をつづけ、『労働者絵入り新聞』に220点以上の作品を提供した[Töteberg 1978 : 78]。とくに槍玉にあげられたのは軍国主義と資本主義の提携であるが、批判の対象はあらゆるものに及んでいる。たとえば、『擬態』という作品は、ゲッベルスがヒトラーに髭をつけてマルクスに変装させている姿を提示し、労働者に取り入ろうとするナチズムの似非社会主義を風刺している(図版2)。説明文にはこう書かれている。「ナチの理念を労働者に押しつけようとするあらゆる試みが失敗に終わった後、ゲッベルスは最後の絶望的な着想を得た。今後、労働者の前で演説するときは、カール・マルクスの髭をつけるよう、『総統』を説得したのである」。攻撃の矛先は、ナチ党の公認芸術にも向けられた。なかでも『戦争』という作品は、戦場を馬に乗って進む裸の英雄的な若者の絵を素材としながら、そこにヒトラーを同乗させることで絵のイメージを異化し、ナチの芸術様式の空虚さを暴露している(図版3)。ここでは「政治の美学化」がパロディ化され、滑稽なものとして笑いとばされているのである。

もっとも、歴史的に見れば、ハートフィールドの活動は効果をあげなかった。ヒトラーの権力掌握後、『労働者絵入り新聞』は発禁となり、1931年には50万部に達した

発行部数も、1936年にはわずか1万2000部に激減した [Töteberg 1978 : 87]。これによってハートフィールドの影響力は大きく制約されることになったが、彼の作品のものにも問題があった。『ヒトラー式敬礼の意味』に見られるような、独裁者の背後に資本家の姿を見いだす説明は、共産党の公式見解にしたがったもので、ナチズム批判としては正鵠を射ていない。ヒトラーは大衆を基盤に権力を獲得したのであって、けっして資本家の傀儡ではなかったからである。ハートフィールドの作品に違和感をおぼえたとすれば、それは彼がときに敵の正体を見誤り、的はずれな批判に終わっている点だろう。フォトモンタージュは本来、敵の言説をそのまま利用すべきものであって、これに手を加えれば加えるほど、批判の痛快さは損なわれる。重要なのは、敵自身に語らせることである。ともあれ、共産党と関わりをもつことが身の危険につながった以上、共産党系新聞に掲載された作品、ましてや共産党の公式見解を表明した作品など、一般大衆が敬遠するのも無理はないだろう。

だがそれにもかかわらず、ハートフィールドの作品には大きな可能性が示されているように思われる。彼のフォトモンタージュは、容易に理解できるわかりやすいメッセージを表現し、きわめて民衆的な性格をもっていた。エルンスト・ブロッホは、この点を次のように説明している。

「ピカソは最初に『つなぎあわせのがらくた』を描いたのだが、それは教養ある民衆にとってすら恐ろしいものだった。ハートフィールドは、多くの教養人がモンタージュなど知りたくもないと思うほど、民衆に近かった」 [ブロッホ 1994 : 676]。

ベンヤミンにしたがえば、民衆がピカソを拒否する一方、ハートフィールドを受容するのは、絵画にくらべて写真の「社会的重要性」 [ベンヤミン 1970 : 34] が大きいためである。一般に写真は具象的で多くの説明を要せず、直感的に理解できるという意味で、民衆に近いメディアといえる。ハートフィールドは、この写真という新しいメディアを利用することで、大衆に効果的に働きかけることができると考えていた。「新たな政治的問題は、新たな宣伝手段を必要とする。このためには、写真が最大の説得力をもっている」 [Töteberg 1978 : 105]。彼の考えでは、「大衆への煽動的・宣伝的效果」こそが「われわれの活動の基盤」 [Töteberg 1978 : 51] だった。大衆にとっては、フォトモンタージュは内容が理解しやすいばかりでなく、その技法の習得も容易だった。彼自身、『労働者絵入り新聞』の読者が自分でモンタージュを制作するようもとめ、1938年には同紙上でコンクールを催した。フォトモンタージュは「とく

に画家としての教育を受けておらず、その技術もない人々にも、より簡単に自己を視覚的に表現する機会を与える」[Töteberg 1978: 81] ものだったのである。

さらにまた、敵の言説を逆用して風刺するという点でも、ハートフィールドは民衆に近かった。敵から与えられた素材を利用して、自分たちなりの対抗的な言説をつくりあげていくのが、弱者の戦術である。従属的立場にある民衆は、現状の体制を変革することができなくても、体制の内部で何とか自己を表現して、これを超越することができる。民衆文化には風刺やパロディが多く含まれているが、それが生み出す笑いは権力を異化し、相対化する力をもっている<sup>8)</sup>。ハートフィールドの作品にはそうした民衆のユーモアに通ずるものが含まれており、だからこそ大きな説得力をもっているのではないかと考えられる。第三帝国期に広まったジョークのなかにも、同じような風刺を見いだすことができる。そこで次に、民衆の批判的言動に焦点をあてて、そうした風刺の技法を明らかにしたい。

#### 4 ユーモアの破壊力

亡命社会民主党の『ドイツ通信』[Behnken 1980] が明らかにしているように、ナチ体制下の民衆は様々なかたちで不平・不満を表明していた。その多くは抵抗を呼びかけるような露骨な政治的主張を行うものではなく、含みをもたせた表現で遠回しにあてこずるような内容のものだったが、第三帝国期のジョークのなかには、諺や格言、語呂合わせなどにかこつけて、ナチ支配の矛盾を鋭くついたものが数多くあった<sup>9)</sup>。たとえば、ドイツの諺に「嘘は足が短い」(嘘はすぐにばれるという意味)というものがあるが、これをゲッベルスにあてつけて「嘘は片足が短い」(ゲッベルスは小児麻痺が原因で左足が短かった)といいかえることで、ナチズム批判に転用することができた。同様に、戦時中に広まったジョークに「バターがまもなくたくさん出回るらしい、なぜなら総統の写真の額縁が取り外されたから」[関 1980: 191] (額縁を取り外すという意味の語 *entrahmen* には、牛乳から乳脂を取るという意味もある) というものがあつたが、そこでは二重の意味をもつ言葉によって、食料供給の不足と総統神話の崩壊とが結びつけられた。こうしたジョークの多くは、ヒトラーやゲーリング、ゲッベルスなどの指導者を揶揄する内容で、ナチズムへの敵意のあらわれというより、

8) こうした民衆文化の理解については、ミハイル・バフチンのカーニヴァル論 [1973] から大きな示唆を受けている。なお、ベンヤミンとバフチンの類縁性を指摘したものとして、テリー・イーグルトンの研究 [1988] を参照。

9) ナチ時代のジョーク集としては、ハンス＝ヨッヘン・ガム [Gamm 1990]、ラルフ・ヴィーナー [Wiener 1994]、関楠生 [1980] の編集したものがあげられる。

鬱憤晴らしというべき性格のものだったが、慣用的な表現で政治を風刺し、これによって痛快な笑いを生みだしており、その力にはナチ当局も太刀打ちできなかった。民衆の意識を反映したこれらのジョークは、当局の取り締まりにもかかわらず、日常的な会話を通じて急速に広まることになった。

もっとも、公然たる批判は処罰をまぬがれなかった。はやくも1934年12月には「国家と党にたいする悪意ある攻撃を防止するための法律」、いわゆる「悪意法」が施行され、「帝国の安寧ないし政府、ナチ党およびその構成員の名誉を著しく傷つける」ような言動すべてが処罰の対象とされるようになった [Gamm 1990: 231]。戦時期になると、そうした言動がしばしば「国防力の破壊」として死刑に処せられ、言論統制が強められた。しかもまた、批判的言動の政治的な効力そのものにも限界があった。人々はたえずナチ政権への不平・不満を口にしていたが、その大部分は個別の利害にとらわれ、孤立しており、受け身の態度に終始し、積極的な反対行動に向かうものではなかった。だが少なくともそれは、民衆の間に批判的な動向が潜在していることを示しており、反ナチズム勢力の足場、ないしは抵抗の基盤をなすものといえるだろう。体制を全体として拒絶し、その打倒をめざす言動だけを抵抗と呼ぶとすれば、その他の言動はそこからの偏差としてしか理解されないことになるが、戦術的な観点からすれば、体制に真っ向から対抗することが必ずしも有効とはいえないし、直接の対決を避けることによって成果をおさめるということも十分にありうるだろう。とくに後者の究極的な形態として、表向きは体制順応的な言説が痛烈な体制批判となる可能性が考えられる。それはナチズムの言説を転倒させて、これをナチズム批判の武器にしてしまうことである。敵の言説を逆用した批判は、敵に攻撃の口実を与えずに、敵の力を利用できるため、弱者にとっては強力な武器となりうる。とくにそれは、ナチズムという強敵にたいしては有効な戦術であると考えられる。民衆のジョークのなかには、そうした転倒の例をいくつか見いだすことができる。たとえば、ミュンスターのガーレン司教に関する次のような小話がある。

「ある日、司教がミュンスターのドームの説教壇からナチの青少年教育を鋭く攻撃したとき、一つの野次にさえぎられた。『子供をもたない男に、子供の教育をうんぬんする資格があるのか！』 ガーレン司教はその野次に鋭い口調で応酬した。『この教会で総統の批判をすることは許されませぬぞ』 [関 1980: 90-1]。

ガーレン司教の応酬は批判的言辞を弄したものではなく、むしろ表向きは批判を戒めているのだが、それが逆説的にも見事な批判となっている。正面切つての批判では

なく、相手の言葉尻をとらえた批判であるため、これに反論することは難しいだろう。彼は敵の攻撃を誘いだしながら、機知に富んだ言葉で巧みに身をかまし、攻撃の矛先を敵自身に向けかえている。こうした鮮やかな転倒によって相手に墓穴を掘らせるところに、この小話の痛快な面白さがある。これはあくまでジョークとして伝えられたものだが、同じようなことが実際にもおこったという記録がある。ある女性は「これらすべては一人の犯罪者に責任がある」と発言したのをヒトラー誹謗と訴えられたが、裁判でこの発言がヒトラーをさしているという訴えを否定して無罪となった。有罪判決を下すためには、その犯罪者がヒトラー以外には考えられないことを認めなければならなかったからである〔宮田 2002：147〕。「ドイツ式敬礼」に関しては次のような小話がある。

「2人の精神科医がばったり出くわした。一人が『ハイル・ヒトラー』と挨拶をした。するともう一人が答えた。『君が彼を治してやれ』」〔関 1980：20〕（「ハイル・ヒトラー」は「ヒトラーを治してやれ」という意味にもなる）。

敬礼の意味を故意に取り違えることで、ヒトラーへの忠誠の誓いが突如として侮蔑の表現となり、笑い事にされるのである。「ハイル・ヒトラー」と挨拶することは義務であったが、この小話のように「ヒトラーを治してやれ」という意味をこめて挨拶しても、表面上は義務にしたがっているから、当局としてはこれを処罰できないばかりか、要求までしていることになる<sup>10)</sup>。こうした痛烈な皮肉は、「ドイツ式敬礼」を拒否したり、回避したりすることなしに、それを骨抜きにしてしまう力をもっている。

明確な敵意をあらわしていない言動にたいしては、当局の対応は腰の定まらないものだった。政府やナチ党にたいする批判的言動を取り締まった「悪意法」にしても、これにもとづいて処罰されたのはほとんどがヒトラー個人に関する発言で、他の指導者に関するものは処罰をまぬがれることが多かった〔Dörner 1998：69〕。また、記念碑などに不敬を働いても、処罰されることはほとんどなかったようである。たとえば、『ベルリン絵入り新聞』は1939年はじめにオリンピック・スタジアムの彫像『走者たち』と戯れる若い女性の写真を掲載しているが、これを見ると、彼女が無邪気に5人目の走者を気取ることによって、裸のたくましい走者たちの姿が滑稽なものに異化し

10) このほかにも、「ドイツ式敬礼」をめぐるでは、敬礼を拒否することにはじまって、ほかの挨拶をしたり、こっそりと回避したり、だらだらと手をあげたり、はっきり発音しなかったり、簡単に済ませたりすることまで、様々な非同調の可能性が存在した。



図版4 ベルリンっ娘



図版5 キッチュな商品

ていることがわかる（図版4）[*Berliner Illustrierte Zeitung* 1939 Nr. 1 : 29]。それは、こうした冒流的な行動でさえ、軽いいたずらとして当局の目こぼしにあずかったことを示している。

同様のことは、国民的シンボルの取り扱いを規制した「キッチュ法」をめぐっても生じている。ナチ政権成立直後、ヒトラーの肖像やハーケンクロイツのマークのついたキャラクター商品が氾濫したが、ナチ当局の目からすると、その多くはキッチュで悪趣味であり、国家の象徴を冒涇するものにほかならなかった（図版5）。そこで制定されたのが「国民的シンボルの保護のための法律」であるが、同法が厳格に適用されることはなく、徹底した規制は行われなかった [Steinberg 1975 : 80-3]。というのも、これらの商品はナチズムを嘲弄する意図をもってつくられたものではなく、むしろこれを歓迎する民衆の感情を反映したものだからである。こうした商品を有害なものと考えていた当局も、その背後にある民衆の感情に配慮せざるをえなかったから、むやみに規制するわけにはいかなかった。とはいえ、これらの商品が国民的シンボルを滑稽なものとしている点で、風刺やパロディと同様の異化効果を発揮していることにはかわりはない。当局がこれを危険視していたという事実は、そこに権力をキッチュ化するユーモアの破壊力が潜んでいることを示唆している。

このことはさらに、遊び心や親近感、不注意でさえも、「政治の美学化」にダメージを与える可能性があるということを示しているように思われる。たとえば、党大会の集会や行進では、あらゆる参加者が指示どおりに動く必要があった。参加者への注意書きにもあるように、「一人でも失敗すれば党が笑いものになる」 [Loiperdinger 1987 :

112] からである。「政治の美学化」が生みだした壮大なモニュメントも、一点の瑕疵によって瓦解することがありえたのだった。

戦争末期、体制の威光が弱まってくると、抵抗グループの動きが活発になる一方で、ナチズムを痛烈に批判する言動も増加した<sup>11)</sup>。親衛隊保安部の世情報告は、1942年夏に「ほとんど敵意だけをあらわしているような政治的ジョークを進んで受け入れようとする傾向が強くなっている」[Boberach 1984: 3922] と指摘している。翌年の夏には次のような報告もある。

「スターリングラード以降、総統の人格にたいしてさえ、国家にとって有害で卑俗なジョークを語ることが著しく増大している。レストランや職場やその他の場所での会話で、民族同胞はたがいに『新しい』政治的ジョークを語り合っており、その際、ある程度害のない内容と明確に敵意をもったものとしばしば区別していない。たがいにほとんど面識のない民族同胞でさえ、政治的ジョークを交換している」[Boberach 1984: 5445-6]。

スターリングラードの敗戦でヒトラーの軍事的失敗が明白になったため、彼を無条件に賛美する宣伝はそれだけでもの笑いの種となった。ゲッベルスがくり返し賞賛したヒトラーの謙虚さにたいしては、自分の業績を誇示する彼の自己賛美の言葉が対置され、その「天才的直観」については、「それは彼がイタリアを同盟国として選んだ理由を説明する」[カーショウ 1993: 236] という皮肉な言葉がささやかれたという。ヒトラーはいまやみずからの墓掘り人となり、没落の喜劇を演じるようになったのである。終戦の2ヶ月前、ベルヒテスガーデン近郊の町で開催された集会の状況について、同地の警察は次のように報告している。

「式辞の最後に国防軍の隊長が総統への『ハイル』を唱えたとき、国防軍、国民突撃隊の隊列からも、見物していた市民たちからも返答はなかった。この大衆の沈黙は実に重苦しいものだったが、おそらく国民の本当の考えをもっともよく反映している」[カーショウ 1993: 238-9]。

かつて大衆が総統への忠誠を表明した舞台は、いまや総統の権威を失墜させ、彼と

11) 1943年以降、民族裁判所は4000名余の被告のうち2000名余に死刑を宣告したが、そのなかにはジョークを口にしたために「敗北主義者」や「国防力破壊者」として処刑された人々がかなりの数を占めていた [Wiener 1994: 9]。

国民の反目を露呈させる場へと変質した。大衆の重苦しい沈黙によって、ヒトラーの最大の武器が彼自身に矛先を向け、独裁者は自縄自縛に陥ったのである。「政治の美学化」を転倒させたものという意味で、これほど「芸術の政治化」と呼ぶにふさわしいものはないだろう。

## 5 おわりに

ヒトラー暗殺を企てたエルザーは、逮捕後の供述で「暗殺を成功させるつもりはなかった」と釈明しているが、その言葉の意味をスターンは次のように解説している。

「こうした言葉こそ……個人的決定にもとづいて『民族共同体』から抜けだした者が、カフカのヨーゼフ・Kの世界へ足を踏み入れる地点である。加害者の方が必ずしも全面的に間違っているのではなく、被害者も心のなかでは加害者のやり方を認めているような世界、あたかもその被害者にたいする支配がより大きな権力の問題以上のものであるかのような、あのカフカの世界へである」[スターン 1983：217]。

スターンが述べるように、「ヒトラーの真の敵」は何よりもカフカの世界の住民でなければならない。すなわち、機構の内部に入りこみ、これに身を任せながら、その不条理を告発する異邦人である。ベンヤミンであれば、これを「遊歩者 Flaneur」と呼ぶだろう。群衆として夢を見つつ、個人として覚醒している遊歩者こそ、彼のもとめる革命家の姿である [ベンヤミン 1975a：23-4]。敵の目を通して見る者が、敵の支配する体制を異化し、転覆の好機を見いだすことができる。抵抗の可能性は、抑圧的な体制そのものに潜んでいるのであって、ベンヤミンがいうように、「救いは連続的な破局のなかの小さな亀裂にかかっている」[ベンヤミン1975b：248] のである。この亀裂について「政治の美学化」を転倒させ、攻撃の武器とすること、それが「芸術の政治化」にほかならない。

ヴォルフガング・ハウクもまた、そうした転倒に「抵抗の美学」[Haug 1987：170]を見いだしている。彼によれば、ファシズムのイデオロギーには特殊ファシズム的な要素はなく、特殊なのはむしろその編成の仕方である。したがって、これらの諸要素に反対しても意味はない。むしろファシズムからイデオロギー的諸要素を奪い取り、それらを編成しなおすべきだというのである。これによって、ファシズムがわがものとした力を反ファシズム闘争に利用することが可能となろう。ハウクはこうした転倒の原動力を、民衆を主体とする笑いに見いだしているが、ベンヤミンもまた、ユーモ



アに期待をかけていた。

「とはいえ、階級闘争のなかにも、繊細な精神的なものは登場するし、それも、勝利者の手にころげこむ戦利品のイメージとして登場するのではない。それらのものは、確信や勇気やユーモアや策略や不屈さとして、この闘争のなかに生きている」[ベンヤミン 1969a : 114-5]。

ハートフィールドのフォトモンタージュは、ナチズムの宣伝をパロディによって転倒させ、ナチズム批判の武器にすることを狙いとしていた。権力を笑い飛ばす民衆のジョークのなかにも、そうした転倒の契機を見いだすことができる。「政治の美学化」にユーモアで切り返すことで、これを自縄自縛に陥れ、その力を反ファシズム闘争に用立てることが可能となる。ベンヤミンとともにわれわれは、何よりもそこに解放の可能性を探らなくてはならないだろう。

もっとも、こうした転倒の政治的効力にも限界がある。権力を笑い飛ばすことは、これを相対化することを意味しており、苦々しい現実にたいする不満のはけ口を提供して、結局は体制を維持することに寄与するかもしれない。事実、ゲッベルスは政治的ジョークの効用を認識しており、無害なジョークを黙認するばかりか、奨励することさえあった。さらにいえば、笑いによる相対化は権力を少なくとも消極的に受け入れ、場合によってはこれを歓迎する感情を表明したものでもありうる。ヒトラーの写真つきのキャラクター商品は、彼を嘲弄するものではなく、むしろ彼にたいする親しみの表現だった。だがそれでもなお、そこにはナチズムが怖れるユーモアがあらわれているのであって、それは崇高な総統のイメージを破壊してしまう力をもっている。権力をキッチュ化する民衆の想像力は両義的であり、体制を安定させると同時に、これに揺さぶりもかけるのである。

もちろん、民衆の想像力にどの程度の政治的効力を認めるべきかについては、議論の余地があろう。ドイツの民衆が最後まで積極的な行動にたちあがらず、みずからの手で解放をなしとげられなかったことは、歴史的な事実である。彼らがたえず不満を口にしていたとしても、体制を打倒するほどの力をもたなかったし、最終的な解放をもたらしたのはむしろ、連合国軍という外部の力だった。だが少なくともいえるのは、そうした言動が民衆の間に広く潜在する批判的な動向を示していたことである。それはあくまで意識の領域にとどまるものだったかもしれないが、それでも体制を内部から浸食し、弱体化する力として働いたのであり、実際の抵抗活動をささえる精神的な基盤となりえた。「政治の美学化」からの解放は、これにとらわれた意識の解消によ

って達成されるのであって、政権の交替によってではない。「ヒトラーの真の敵」は、抵抗運動の闘士というよりはむしろ、一人一人が自己の内面に見いだすべき存在なのであり、それも悲壮な犠牲的精神ではなく、ユーモアの喜劇的精神に期待をかけなくてはならないだろう。いずれにせよ、体制末期には「政治の美学化」が魔力を失い、国民の多くがその呪縛を脱却していた。焦土と化したドイツで広まった次のジョークは、「芸術の政治化」の凱歌に聞こえなくもない。

「時の経つのはなんとはいかことか！ もう千年が過ぎてしまった」[関 1980：203](ヒトラーは千年帝国を呼号していた)。

### 文 献

- ベンヤミン, ヴァルター, 1969a 「歴史哲学テーゼ」(野村修訳)『ベンヤミン著作集1』晶文社。
- , 1969b 「カール・クラウス」(高木久雄・佐藤康彦訳)『ベンヤミン著作集7』晶文社。
- , 1970 「複製技術の時代における芸術作品」(高木久雄・高原宏平訳)『ベンヤミン著作集2』晶文社。
- , 1971 「生産者としての作家」(石黒英男訳)『ベンヤミン著作集9』晶文社。
- , 1975a 「パリ——十九世紀の首都——」(川村二郎訳)『ベンヤミン著作集6』晶文社。
- , 1975b 「セントラル・パーク」(円子修平訳)『ベンヤミン著作集6』晶文社。
- , 1993 『パサージュ論』(今村仁司・三島憲一訳)岩波書店。
- バフチン, ミハイル, 1973 『フランソワ・ラブレーの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』(川端香男里訳)せりか書房。
- Behnken, Klaus (Hrsg.), 1980 *Deutschland-Berichte der sozialdemokratischen Partei Deutschlands (SOPADE) 1934-1940*, 7 Bde., Frankfurt/M.
- ブロッホ, エルンスト, 1994 『この時代の遺産』(池田浩士訳)筑摩書房。
- Boberach, Heinz (Hrsg.), 1984 *Meldungen aus dem Reich 1938-1945. Die geheimen Lageberichte des Sicherheitsdienstes der SS*, 17 Bde., Herrsching.
- Broszat, Martin, 1981 “Resistenz und Widerstand”, in: Broszat u. a. (Hrsg.), *Bayern in der NS-Zeit*, Bd. 4, München.
- Dörner, Bernward, 1998 “Heimtücke”. *Das Gesetz als Waffe. Kontrolle, Abschreckung und Verfolgung in Deutschland 1933-1945*, Paderborn.
- イーグルトン, テリー, 1988 『ワルター・ベンヤミン——革命的批評に向けて——』(有満麻美子・高井宏子・今村仁司訳)勁草書房。

- Gamm, Hans-Jochen, 1990 *Der Flüsterwitz im Dritten Reich*, München.
- Gruchmann, Lothar (Hrsg.), 1970 *Autobiographie eines Attentäters. Johann Georg Elser*, Stuttgart.
- Haug, Wolfgang F., 1987 *Die Faschisierung des bürgerlichen Subjekts*, Hamburg.
- Heartfield, John, 1981 *Krieg im Frieden. Fotomontagen zur Zeit 1930-1938*, Frankfurt/M.
- カーショウ, イアン, 1993『ヒトラー神話——第三帝国の虚像と実像——』(柴田敬二訳) 刀水書房。
- Loiperdinger, Martin, 1987 *Rituale der Mobilmachung: Der Parteitagfilm "Triumph des Willens" von Leni Riefenstahl*, Opladen.
- März, Roland, 1971 "Über den Verfremdungseffekt in den Fotomontagen John Heartfields", in: *Staatliche Museen zu Berlin: Forschungen und Berichte*, Bd. 13, Berlin.
- Mason, Timothy, 1981 "Arbeiteropposition im nationalsozialistischen Deutschland", in: Peukert/Reulecke (Hrsg.), *Die Reihen fast geschlossen*, Wuppertal.
- 宮田光雄, 2002『ナチ・ドイツと言語——ヒトラー演説から民衆の悪夢まで——』岩波書店。
- Ortner, Helmut, 1993 *Der einsame Attentäter. Der Mann, der Hitler töten wollte*, Göttingen.
- ポイカート, デートレフ, 1991『ナチス・ドイツ——ある近代の社会史——』(木村靖二・山本秀行訳) 三元社。
- ロートフェルス, ハンス, 1963『第三帝国への抵抗』(片岡啓治・平井友義訳) 弘文堂。
- Schockel, Erwin, 1939 *Das politische Plakat*, München.
- 関楠生 (編訳), 1980『ヒトラー・ジョーク——ジョークでつづる第三帝国史——』河出書房新社。
- Steinberg, Rolf (Hrsg.), 1975 *Nazi-Kitsch*, Darmstadt.
- スターン, ジョゼフ・P, 1983『ヒトラー神話の誕生』(山本尤訳) 社会思想社。
- 田野大輔, 1998「大衆のモニュメント——『総合芸術作品』としてのナチズム——」『京都社会学年報』第6号。
- Töteberg, Michael, 1978 *John Heartfield mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Reinbek bei Hamburg.
- Wiener, Ralph, 1994 *Gefährliches Lachen: Schwarzer Humor im Dritten Reich*, Reinbek bei Hamburg.